

いじめ問題に対する予防教育についての一考察

A Consideration of Preventive Education for the Problem of Bullying

寺 西 康 雄 水 上 義 行
TERANISHI Yasuo MIZUKAMI Yoshiyuki

はじめに

平成22年秋以降、いじめ自殺が相次ぎ、各地の学校でいじめを予防するための試みが広がっている。

筆者はかつて学級担任として、深刻化したいじめに遭遇し、悪戦苦闘した経験がある。それ以来、いじめ問題をライフワークと考え、取り組んできた。その過程で、「予防教育こそ最良のいじめ対策である」との思いを強くした。現在は、スクールカウンセラーとして、場や機会をとらえ、いじめ予防の大切さを訴え続けている。

そこで、本研究では、いじめ問題に対する予防教育⁽¹⁾について、実践事例を通して考察したい。

1 「不自由な人の方が……」（A子の詩）を読み、自分にもいじめの経験がないかを振り返ることによって、いじめとはどんなに人の心を傷つけるものであるかを考える授業

授業の導入として、筆者は、子どもたちに「今、全国的にいじめが大きな問題になっている」ということを知ってほしいとの思いで、いじめに関する新聞記事を満載したスクラップブックを見せたり、OHPシートで新聞記事を提示させたりした。

そのことによって、子どもたちのいじめへの関心を高め、本時のねらいへの方向づけをすることができた。

次に、本校のいじめに関する実態調査の「学年別発生件数グラフ」と「種類別発生件数表」を提示して、「自分たちの学校の内いじめについての調査結果をみてどう思うか」と問いかけた。

その結果、子どもたちに対して、〈男女を問わず、どの学年にもいじめがたくさん発生していること〉〈いじめが多岐にわたっており、しかも特定の子どもに集中していること〉に気づかせ、いじめを余所事としてではなく自分たちの身近な問題として受け止めさせることができた。

その上で、「5年生になってからいじめられたことがありますか」と問いかけた。10数名が挙手し、どのようにしていじめられ、どんな気持ちだったかを発表した。また、「いじめられている

のを見たことはないですか」との問いかけに対しても、数名の子どもが発言した。

そこで、筆者は、全校詩集「しらとりのつばさ」を子どもたちに配り、「いじめている人には、いじめられている人の心の痛みが分からないのでしょうか」と問いかけてから、一篇の詩を朗読していった。障がい者の兄をもつA子が周囲から言葉の暴力を受け続けてきた体験を切々と書き綴った日記をもとに改作した詩である。72行に及ぶA子の詩を読んでいるうちに、子どもたちのすすり泣きが聞こえてきた。

読み終えてから子どもたちに感想を求めた。子どもたちは誰一人手を挙げない。静まり返っている。そっと涙をぬぐっている子どももいる。沈黙が続く。

筆者は、当初、A子の詩に対して子どもたちは、「A子さんの気持ちが分かる」「Aさんをいじめた人は卑怯で弱虫だ」といった発言が続出すると思っていた。しかし、予想は見事に外れた。長い沈黙に耐えながら、心の中で、「それぞれが思いに浸っている、この時を大切にしたい」と自らに言い聞かせながら、ひたすら待った。

その間、次のような子ども一人一人の「心の声」が聴こえてくるようだった。

「A子さんが、こんなひどい目に遭っていたなんて気づかなかった」

「A子さんに対して、そんなにひどいことを言う人がいたとは知らなかった」

「優しく、いつも笑顔のA子さんだけど、本当は辛い気持ちをじっと我慢していたんだね」

私たち教師は、授業中の様々な反応から子どもたちを理解する手がかりを得ることができる。子どもの心の中は時々刻々と変化する。活発な発言の中だけではなく、沈黙や涙の中にも子どもの心の揺れや蠢きがある。そこから、子どもの本当の姿や真実をつかむことができる。

筆者は、しばらくして、集団による無視をされた体験を綴ったB子の日記を読み聞かせた。そして、書き手のB子を指名し、発言を促した。

B子 C子さんたちに無視されて、悲しくて、明日も、明後日も、これからも、ずっと続くと思うと不安で、どうせ無視されているのなら学校を休んでみたいと思いながら日記を書きました。書いているうちに「C子さんたちが、あなたを無視しようと言ってたよ」と私に教えてくれた人の聞き間違いだったのかもしれない、でも、やっぱり、本当にそう言ったのかもしれない、とか考えました。もし、聞き間違いだとすれば、また話し合えば本当のことが分かるかもしれない、もっとよく聞いて、ちゃんとした証拠のあることしか信じない方がいいな、と日記を書きながら思っていました。

A子の詩に涙し、沈黙した子どもたちであったが、B子の発言を契機に次々と手が挙がって、本音を語ってくれた。そして、授業の終わり頃、それまでずっと沈黙を保っていたC子が挙手し、次のように発言した。

C子 私たちの仲間と一緒に行動していると、いつもB子さんが文句を言ってきたので無視しました。私は、もともとB子さんを嫌いではなかったから無視したくありませんでした。でも、今度は私が無視されると困るし悲しいのでB子さんを無視しました。A子さんの詩やB子さんの日記、それからB子さんの話を聞いて、あんなことをしなければよかったと……。

B子の発言からは、C子たちに無視されて、自分が疎外された悲しさや寂しさ、辛さが痛いほど伝わってきた。一方、無視したC子の発言からも、「本当はB子さんを無視したくはなかったが、もしそうしなかったら今度は自分が無視される」という不安、つまり「ひとりぼっちになりたくない」という気持ちでいっぱいだったことが伺える。つまり、B子もC子も、共に「ひとりぼっちになりたくない」という気持ちだったのである。そのことに、多くの子どもたちが初めて気づいて、共感し、再び、教室中が静まり返ったのだった。

筆者は、この授業を通して、子ども一人一人が「自分にもいじめの経験がないかを振り返ることによって、いじめとはどんなに人の心を傷つけるものであるか」を深く考え、理解することができたと思っている。

2 いじめを劇化し、ロールプレイングを通して、いじめられている人の心の痛みを知るとともに、「いじめを許さない一人一人の強い心と態度」が大切であることが分かる授業

第1時は、「自分たちの身の回りで起きているいじめは、どのようなものがあるかを考えながら、いじめの劇をつくってみよう」とのテーマでシナリオづくりに取りかかった。子どもたちは、思い思いに想を巡らしながら意欲的に取り組んだ。

出来上がった一人一人のシナリオを各グループごとに回し読みをしたり、シナリオをもとに役割を分担しながら読み合わせをしたりした。そのことを通して、いじめられている人の気持ちが少しずつ分かってきたようであった。しかし、子どもたちのシナリオは、いずれも、筆者が願っていた「自分たちの日常的な生活に根ざしたもの」や「いじめっ子の心の痛みをより切実なものとして実感できるようなもの」からは程遠いものばかりであった。

そこで、子どもたちに対して、次のように呼びかけた。

「A子さんの詩が載っている全校詩集『しらとりのつばさ』は、明日、全校のみんなに配られます。それを読んで、また、A子さんに対して悪口を言ったり、無視をしたりする人が出てくるかもしれません。そんなことが起こったらどうするか。また、そんなことが起こらないようにするにはどうするか。それをシナリオにしてみてください」

第2時は、各グループが各自のシナリオをもとに、いじめっ子・いじめられっ子・見て見ぬふりをする子・おもしろがって見ている子の役割を交代し合いながら「いじめ劇」⁽²⁾を演じた。

C子のいるグループでは、最初に、C子が「いじめられそうになっているA子役」を演じた。いじめる役の子どもたちは、シナリオに従ってA子役のC子への無視を演じた。C子は、何とか仲間に入れてもらおうとするが、「いじめっ子役」の子どもたちは無視を続ける。各自が登場人物になりきり、アドリブも入って迫真の演技となっていた。C子も、当初、照れ笑いを浮かべていたが、次第に顔からは笑みが消えていき、やがて、「お願い、仲間に入れて！お願い、仲間に入れて！」と哀願し、土下座した。そのとき、C子の眼には涙が光っていた。

C子は、そのときの気持ちを次のように書いている。

「お願い、仲間に入れて、お願い……」と言いながら本当にいじめられているような気がしてきました。最後に土下座をして、「入れて」と言いました。そのとき、眼に涙がたまりました。本当にいじめられている人の気持ちがよく分かりました。

筆者は、子どもたちに授業の途中や後で「書いては考え、考えては書く」という営みを繰り返してきた。この一連のいじめ防止をめぐる学習の一応の区切りとする意味において、子どもたちに「この学習で何を学び、そのことによって何がどのように変わったか」を自分なりに考え、自分の言葉で作文にまとめさせた。さらに、それを子ども同士で交流させ、話し合わせていった。その中で、E子の次のような作品が生まれた。

C子さんが土下座をした。髪の毛がC子さんの顔を隠している。涙が見えた。C子さんが変わってきているのだと思った。いや、みんなが変わってきているんだ。これまでのC子さんとは大違いだ。おせっかいで、おっちょこちょいで、少し意地悪っぽいC子さんの性格。私には、今はC子さんの魅力として見えてきた。

この勉強は、ずっと心に残り続けるだろう。私の宝物になるだろう。こんな勉強、一生できないかもしれない。私たちは、その一生できないかもしれない勉強をした。よかった。この勉強、このことに取り組んで、ほんとうによかった。

「いじめっ子」として見られていたC子であったが、今回の学習の中で、ぐんぐんと変わっていった。多くの子どもたちがC子の変容を実感し、C子を見る目が変わっていった。これは、詩を読み合う、作文を書く、「いじめ劇」を演じることで具体的に考えることができ、話し合いを通して感情を共有することができたからであろう。とりわけ、ロールプレイングは、クラスメートの中の演者がある場で会話を考え、その状況に迫っていくので、観客となった子どもは深い興味を示し、その劇に吸い寄せられていく。ロールプレイングを演じていた時や見ていた時に感じた気持ちを話し合うことで、今までの自分の経験と重ね合わせて具体的に考えることが容易になるのである。⁽³⁾

3 いじめについて学習してきたことを感想文にまとめ、交流し合うことを通して、いじめを許さない運動を学級・学年・学校全体に広める意欲を高める授業

他学級・他学年にまたがるいじめの場合は勿論のこと、学級内で発生したものであっても、担任の力だけで完全に克服することは困難である。担任の熱意にもかかわらず、子どもたちが無関心であったり、強い抵抗を示したりすることもある。たとえ学級独自の取り組みが上手くいっても、他学級や他学年から特異な目で見られたり、差別を受けたりするようなことも危惧される。学年ぐるみ、学校ぐるみの取り組みが実現してこそ、各学級での取り組みが実を結ぶことになる。

諸富祥彦氏は「私たちのめざすべきは、『いじめの傍観者になりがちな学校の過半数の子どもたちがいじめをなくそうと正義感をもって活動し、ほかの子どもにも働きかけていく共同体』、すなわち『正義の共同体』をつくっていくことです」⁽⁴⁾と述べている。

子どもたちは、いじめについて学習を進めてきた成果を感想文にまとめ、交流し合うことを通して、この取り組みを学級内に留めてはいけないということに気づいていった。そして、子どもたちが力を合わせて他学級や他学年に呼びかけ、働き掛けながら、いじめ追放のための運動や集会を企画・運営し、「正義の共同体」を学年・学校全体へと広げ、発展させていった。

おわりに

いじめは被害者・加害者・観衆・傍観者の四層構造によって成り立っている。⁽⁵⁾いじめの芽を膨らませ、深刻ないじめへと導いていく要因は、加害者と被害者という直接の当事者よりも、大多数の観衆や傍観者の存在にあると言える。したがって、この観衆や傍観者に他人の痛みを我が痛みとし、いじめを許さない心とそれに立ち向かう行動力が育たなければいじめは防止できない。

その意味において、当事者への指導だけではなく、学級のみんなの問題としていじめを取り上げ、解決を図っていくことが大切である。しかも、それは一般的で対症療法的な指導であっては効果が期待できない。子ども一人一人の心を揺さぶり、意識を変えさせていくものでありたい。

注

- 1 真仁田昭・小玉正博・沢崎達夫『子どもをとりまく問題と教育 第6巻 いじめ』開隆堂出版株式会社
- 2 小林 剛『いじめを克服する』有斐閣
- 3 池島徳大『クラス担任によるいじめ解決への教育的支援』日本教育新聞社
- 4 諸富祥彦『教室に正義を！－いじめと闘う教師の13か条－』図書文化社
- 5 森田洋司・清永賢二『いじめ－教室の病－』金子書房